

詠む広場

毎日歌壇

木道は早も泥んこ水芭蕉  
兵庫 小林 怨水  
山国や四方八山笑ふ  
青森市 小山内豊彦  
「前方よし」若葉の覆ふ鉄路かな  
振花や回せば錐になりさうな  
白井市 毘舍利道弘  
ペダル踏む初夏スカートは風はらみ  
力溜め跳ぶも二寸ぞ青蛙  
川越市 益子さとし  
立川市 大西 信子  
三尺がほどのアロワナ夏館  
起きぬげの目葉窓に柿若葉  
福岡 手島喜美江  
東京 望月 清彦  
山梨市 浅川 青磁  
山梨市 浅川 青磁  
三度目のスイッチバック山笑ふ  
東久留米市 矢作 輝  
和歌山市 武友 朋子  
新緑の小径抜ければ美術館  
土岐市 水野 雅子  
ふり返り手を振る音子や藤の花  
小田原市 林 梢  
うららかな本のページをめくる音  
枚方市 谷 亜希  
車いす積んで花見の送迎車  
鶴ヶ島市 青木 律子

調べの鼓動

縁だと思っ。  
今でも毎年4月、句碑に佐藤秀仁眞首  
で導師が経を唱える「法楽会」に参加し  
ている。お祈りをする会だが、故人を悼  
むものではないので、「法要」ではなく  
「法楽」と呼ぶのだと聞いている。  
こうした経緯で、高尾山に行くのが毎  
年の楽しみになっている。普通の桜が終  
わり、山桜の盛りの頃になる。高尾山に  
は登山以外の一面もある。

(ほしの・たかし)俳人

米川千嘉子選

加藤 治郎選

水原 紫苑選

伊藤 一彦選

「ああおいしい」満面で笑いたる友の太き心  
に我もなりたし  
春日市 林田 久子

△評▽日常の喜びや感動を人の前でこんな  
ふうに表示する人は案外少ないかも。それは  
「太き心」から、という着眼にもうなずく。  
つつましく夫のうしろにいる妻の夫には気づか  
ぬ大きてのひら 富山市 わかばやしちかげ

△評▽「大きてのひら」とは妻の有能さや  
頼もしさか。妻も気づいていたら前へ。  
夕方の線路に落ちた単語帳「勇氣」は英語で  
なんていった 東京 結羽 成

添う前に亡父より貰ひし浴衣の糸わが逝きた  
らばふわりと掛けて 大阪市 森川 慶子  
ひと駅と言って彼女は下宿まで六十二年前の  
旅立ち 川西市 波 高し

ノトナレかそれとも緊張ってタツトリか同行  
なくとも歩みゆくべし 掛川市 村松 建彦  
チェーホフの遺体は冷凍牛乳車に積みて独  
逸ゆモスクワに着く 横浜市 大建雄志郎  
花たちとは他人のような顔をして男顔にて葉  
桜茂る 白井市 毘舍利道弘

不躰にひとり一人を見ることのできる幸せ  
スマホの画像 名古屋市 甲斐万里子  
また漬しアパートが建つ休耕地二度と農地に  
戻せぬ未来 延岡市 河野 正

雨の日と散歩しているみたいで誰かが練習  
しているピアノ 津市 川原田明子

△評▽雨の日が友人のように寄り添って  
る。助詞一つで世界が変わる。下句は閑静  
な街を思わせる。雨にピアノの音が良い。  
若くない寝起きの髪をこかしたらガラピシャガ  
ラピシャという音がする 広島市 堀 眞希

△評▽荒っぽくて個性的な音である。朝の  
心理状態、空気感まで伝わってくる。  
君のいる世界とたった三枚のドア越しに裸に  
なっている 横浜市 あ や

もそもそと起きただけでもえらいから今日のた  
まごはふたつにしよう 堺市 平山 詩乃  
満ち足りた日々と言つには欠けているけれど  
五色の虹もきれいだ 大津市 世田 夏雪

陽にかざすと虹が見えるね手のなかのヒマラ  
ヤ水晶に願いを込めて 鳥取市 中ノ島 潤  
濃い雲がぼかんと口をあけていてなにか問題  
あったのだろう 平塚市 芝澤 樹

「帰道道長いよね」って僕言えは「そのぶん一  
緒」とふざけんな(愛) 札幌市 人子 一人  
ぼろぼろの絆創膏がポケットに入ったままで  
もう春が終わる 名古屋市 森本 有

潮風の痛みにひきとめられたままニケはたし  
かに空を仰げり 加古川市 石村 まい

△評▽ループル美術館のサモトラケのニケ  
の失われた頭部。傷ついたギリシャの海と  
空が彼女を放さない。  
ゆうべの音楽祭の中に居て争うことと思  
議を思う 大阪 中村 杏

△評▽こんなふうになつと訪れる真実。な  
ぜ争うのか。なぜ生きるのか。音楽の中で。  
何兆と細胞あって星あって金あったってひと  
りの火葬 熊本市 夏風かをる

木漏れ日は小魚の群れを生みまきはクロード・  
モネの庭を歩いた さいたま市 雨谷 詩穂  
たましいの美しき出口か藤棚に光ひとへにそ  
の身を千切る 東京 山野ゆかり

幸福論 こういう色の血液で生きるいのちも  
ありそうな薔薇 横浜市 永永 キヌ  
ドレスにして造花にして書籍にしてそのかみ  
の砒素グリーン鮮やか 甲府市 村田 一広

砂丘を撫んで離さない空にも空の反実仮想  
メビウスと呼ばれた男さつと歩くと無限の  
輪っかのの上を 倉敷市 中路 修平

乗り損ねたの電車を待つまでのプラットホー  
ムに掌時間 沼津市 本田 影二

△評▽「掌時間」を面白いと思ったが、解釈  
は二通りある。一つはごく短い時間、もう  
一つは手の中でスマホにふれている時間。  
獣医師は手術のリスク説明す交互に犬と我の  
目見つつ 金沢市 竹内 一二

△評▽下の句がさすが獣医師と思わせる表  
現だ。「我と犬の目」でないところに注目。  
日向ぼこしている優雅な野良猫を見かけぬ町  
になつてしまった 高岡市 増澤 千佳

「雲らしい雲だね」雲を褒めた途端すこし解  
放された雲ゆく 池田市 黒木 淳子  
押し花になるかもわたし朝六時三十分発ワン  
マン列車 宮崎 門田 藍子

席ゆるる笑顔の若者ていねいに断るシニアも  
笑顔で返す 山形市 佐藤 紀之  
ボツンと一軒家などの主も充実しちつともポ  
ツンとはしておらず 長岡市 三月 とあ

予期できぬトラブル起こることだけは予期で  
きるのが皮肉なところ 堺市 一條 智美  
祖父宅で句集歌集を手渡されちりばめられた  
ヒントにつながる 京都市 小林 香織

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051(住所不要)毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、〇〇先生(希望選者名)係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(https://mainichi.jp/kadan-haidan/)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます